

書評

東南アジアにおける仲介者の「連続性」と「変化」

弘末雅士著 『世界歴史選書 東南アジアの港市世界

— 地域社会形成と世界秩序 —

一 はじめに

久礼 克 季

東南アジア海域世界、特にマラッカ海峡周辺域をはじめとする島嶼部東南アジアは、古くから沿岸部の港市において交易活動が行われ、常に周辺他地域からの来訪者と接触していた。このことは、一方で産品をもたらす後背地住民や海上民ら地元民と、他方でそれを求めてやって来る外来者との結節点として、港市が重要な役割を担ったことを示している。元来文化や習慣などの異なる両者が併存する状況は、必然的にこれを仲介する役割を持つ者を必要とした。本書は、いわゆる「交易の時代」と称される交易活動の活性化した東南アジアの港市をとりあげる。そして、この時代の外来者と後背地住民ならびに海上民とを媒介した港

市支配者の役割や、その後の植民地支配が展開した時期におけるその役割の変化について、考察している。本書は、二つの視点に立って各論が展開されている。即ち一つは、港市支配者が、一方で港市に來航する外来者の居住しうる港市空間を形成しつつ、他方で後背地住民や海上民と同じ王国民としての関係を形成するという、二つの異なる役割を同時に担っていたという点である。またもう一つは、そのような仲介者がその後の植民地体制の中でも変化しながら、存在し続けたという点である。本稿ではこのような現地仲介者の展開に主眼に置き論及していきたい。

二 本書の紹介

本書は次のような構成よりなる。

序章 広域秩序圏と地元世界

第一章 開かれた港市 — 広域秩序圏の形成媒体

第二章 「異界」の展開

第三章 内陸民の世界観

第四章 海域マレ—世界の形成

第五章 一九世紀における港市・後背地関係の変容

第六章 植民地体制下の港市と現地人インフォーマント

終章 交錯する関係性 — 介在者と権力

各章の概要は以下に述べる通りである。

第一章は、一五世紀以降の東南アジア地域における港市の展開について論じている。一五世紀以降交易活動の活発化により各地に多くの港市が台頭する。各港市は、互いに競争する中で外来者を自港市へ引きつけるための制度作りが熱心となり、多様な出身地の人々を統合するためイスラームおよび上座仏教の受容、中国への朝貢などを積極的に行った。一方、ヨーロッパ勢力が東南アジア地域に参入する中で、一六世紀以降マニラをはじめバタヴィアなど、ヨーロッパ人が統治する港市も現れた。しかしながら、本来外来者たるヨーロッパ勢力は少数派にすぎず、統治者は、非ヨーロッパ系港市住民の動向を無視できなかつた。そうした中で、当時彼らが統治する港市では、ヨーロッパ人と結婚した女性、混血者、また現地人や混血者のキリスト教徒が、重要視されることになった。

第二章では、港市が発展していく時代に展開した、重要な貿易品を産出する後背地や海域に関する「食人」や「女人が島」の伝承や、外来者および被支配者における「超人間的存在」としての港市支配者について論じられている。当時東南アジアでは、内陸後背地住民の「食人」風聞や海域に存在するという「女人が島」伝承が、しばしば外来者との間で語られた。このため、外来者ならびに後背地住民は、互いを「不気味」な存在と見なした。そして両者は、直接

的接触を避け、仲介役を港市支配者に委ねた。その結果、港市支配者は、地元民と外来者との間の交易を独占的に司ることができた。こうして発展していく港市支配者は、外来者や被支配者に神の化身の如く自然界にも影響力を行使できる存在と見なされた。

第三章は、港市の後背地たる内陸部における権威や政治権力の台頭と展開、およびその中で、「土着民」意識の形成について論じる。食糧の多くと交易商品の供給を内陸後背地に依存していた港市は、地元の原理を無視できず、港市の統合原理とは異なつた原理で、後背地住民と関係を築かねばならなかつた。この状況下で、スマトラ島やジャワ島の内陸後背地では、農耕に豊穰をもたらす原理に基づいた権威や政治権力が形成される。いずれの地域でも、港市支配者は、これらの権威や政治権力との関係を維持しようとした。特にジャワ島では、マタラム王国が、外来勢力であるオランダ東インド会社と一時的に対立したものの、全般的に両者は相互依存関係を深めていくことが特筆される。この中で、内陸後背地の住民や政治権力は、彼らの始祖神話や王統紀の中で、自らを神の意志に叶つた「土着民」として正当化し、周辺港市支配者を彼らの血縁者と位置づけようとした。

第四章では、ムラカに端を発する海域マレー世界の形成と展開について論じられている。ムラカは、建国当初、一

方でパサイ、ジャワ、シヤムに服属しつつ、他方で王室と關係を構築した海上民の海軍力を活用して各地へ遠征し、また周辺諸王国との婚姻を通じてこれら地域との關係を強化した。そしてこの關係が商業的に發展していくなかで、イスラームとマレー語が海域世界に広まる。マレー文化は、一六世紀ムラカがポルトガルに占領された後、ムラカに集まっていた多くのマレー人商人が各地の港市に移住することと拡大した。その後一八世紀ムラカの正統な後継者を自認する諸王が競合するなかで、ジョホール・リアウ王国が中心勢力となり、これと協力したブギス人が同王国を主導する。彼らは、一方で彼ら同士の關係を維持しつつ、他方でマレー王族や貴族と通婚關係を形成した。こうしたなかマレー人の意味は、ムラカ・ジョホール王国王族やその臣下という出自より、イスラームや『ムラカ法典』の採用といった文化様式により比重を置くに至った。この状況は、オランダやイギリスが同地域に介入した一九世紀以降も続く。ブギス人の多くは、自らをマレー社会の一員と考え、またオランダもマレー人に関する情報をリアウのブギス人から収集した。

第五章では、一八世紀後半からの港市・後背地關係の變化と、一九世紀の東南アジアにおけるオランダをはじめとするヨーロッパ勢力の拡大について論じられている。スマトラ島のミンナカバウ地区では、一八世紀後半に商業活動

が活性化するなか、盜賊の横行など市場活動の安全が保障できないことや、賭博など非イスラーム的な慣行の蔓延が社会問題となっていた。こうしたなかで、「パドリ派」をはじめとするイスラーム改革運動が展開し、これが沿岸部から勢力を拡大しようとしたオランダと対立するに至った。またジャワ島では、イギリス統治期からの農民の負担増大やその後のオランダ植民地政策による王室軽視から、ジャワ戦争（一八二五—三〇）が勃発した。オランダは、このいずれにも勝利したものの、多額の出費を強いられた。このためオランダは、その後スマトラ島とジャワ島双方において、現地社会の有力首長を植民地首長として取り込む政策をとり、彼らを介して強制栽培制度を導入した。その中で、例えば北スマトラのバタック地域では、現地人首長が、前出の「食人」風聞を改めて強調することにより、ヨーロッパ人支配者と現地社会との仲介役としての存在価値を高めようとした。またオランダ権力を背景に地位を強化したジャワや中部スマトラの首長らは、一般農民の尊敬を保持するため、一族にメツカ巡礼など宗教活動を行わせた。これによりイスラームは、現地において更に影響力を増大させることになった。このようなヨーロッパ人と現地人首長との關係は、マラッカ海峡域の海域世界でも同様に見られた。

第六章は、一九世紀後半にヨーロッパ勢力が植民地体制を構築するなかでの現地仲介者の變化や展開について論じ

る。一九世紀後半以降、ジャワ人上級首長の恣意性に対する批判や他の欧米諸国との対抗のため、オランダは直接統治政策へ転換する。これにより、「原住民官吏養成学校」出身官吏やオランダ人官吏の下で働いた経験を持つ官吏が、新たなエリート層を形成した。一方同政策により、従来の仲介役であった現地人首長や中国系やアラブ系「外来東洋人」や欧亜混血者の地位が低下する。こうしたなかでアラブ人は、ジャワ人と連携して一九一一年イスラーム商業同盟を設立し、これが一九二二年イスラーム同盟と改称され民族主義運動の基点となった。一方欧亜混血者も、一九二二年東インド党を結成、その後この流れを受け継いで東インド社会民主主義協会が成立して、後のインドネシア共産党となった。これらの民族主義運動が展開する過程で、伝統的権威を回復しようとする現地人首長や、自治の拡大を目指すインドネシア人官吏が、この状況を活用してオランダへの情報をコントロールした。こうした中で、共産党の反乱に衝撃を受けたオランダは、民族主義運動を徹底的に弾圧する一方で、インドネシア社会がヨーロッパ社会とは異なる展開をとげるものと見なし、現地の在来権力の一定の復活を認める政策を採った。これにより、現地人官吏や現地人支配者は、一層重視されることになったのである。

三 本書の論評

ここでは、前半で述べた概要をもとに、各章ならびに本書全体で述べられている事柄について論じる。

三、一 各章に関する評論――一五世紀以降の東南アジア地域における仲介者の展開――

第一章で中心に論じられていることは、一五世紀以降の東南アジアにおいて交易活動が活発化するなか、現地住民と外来者とを結び付ける仲介者の必要性が生じ、各港市において港市支配者や長期滞在者および混血者といった媒介者が数多く台頭したということである。しかし、このような仲介者の役割が顕著になった時期が一五世紀以降だったのかについては、疑問が残る。少なくとも、当該地域において地元世界と外来者とを結び付ける仲介役は、これ以前より重要だったのではないかと評者は考えている（この点については後述）。

第二章では、港市支配者が、外来者と現地住民との仲介者たる地位を強化していく過程が示されている。東南アジアをめぐる古くから存在していた「食人」や「女人が島」風聞が、一五―一七世紀に更に不気味さを増し、地元民と外来者との間を仲介する港市支配者の役割がますます重要になったといえる。但し、「女人が島」風聞については、例

えは本書でもとりあげられているトメ・ピレスの記録に、「女人が島」に入り込んだ者が生きて帰れないという記述が無いなど、全ての記述が「不気味さ」を強調する内容を持つてはいない点に注意する必要がある。また第五―六節での議論については、この章の主題である「異界」に関する話題と離れている印象を禁じ得ない。特に、第五節における港市支配者の超人間性に関する記述は、港市支配者も「異界」の人であるという認識を外来者が持っていたという印象を、読者に抱かせてしまう危険性を持つのではないか。第六節で、港市支配者が内陸後背地住民に超自然的存在と見なされる議論が展開され、第五節との関連性が示されるものの、内陸後背地権威などの関係を中心に論じている点を考えて、この両節はむしろ次章に置いた方が良かったのではないだろうか。

第三章で述べられている、港市の発展と同時に内陸後背地の権威や政治権力が台頭し発展していく事例は、港市と後背地の双方が緊密に連関していたことを示している。そのなかで、内陸後背地に形成された政治権力は、港市と後背地住民とを更に仲介する役割を果たしていた。その意味で、この時期は、媒介役を担う者が増加し、沿岸部と内陸部双方に仲介者が存在していたと考えられる。またこうした現象が、現地勢力の港市だけでなく、ヨーロッパ勢力の港市においても同様に見られたことは、軍事面などで優位

に立っていたヨーロッパ勢力も内陸後背地の権威や政治権力を無視し得なかったという点で、非常に興味深い。惜しむらくは、タイなど大陸部の記述が、実質的に先行研究の紹介のみになっていいることである。アユタヤと内陸後背地との関係が、島嶼部と似た状況を示す事例のもとと詳しい説明があれば、この論は更に広い地理的範囲をカバーすることができただろう。

第四章では、第三章まで論じられた内陸後背地とのいわば縦の関係を形成していた港市に対して、海上民を利用して港市同士の横の関係を形成し発展させたところに、ムラカの意義を置いているといえよう。そしてこの発展の下でマレー文化が形成され、同文化が時代の経過とともに拡大していく中で、ブギス人がマレー文化の重要な担い手になった。その意味でこれは、仲介的役割を果たす者の構成範囲が拡大していった事例の一つと考えることができるだろう。しかしその場合に、本章の最重要キーワードであるマレー文化の定義について、その起源を含め、十分な説明が無いのは問題である。マレー文化の定義を明らかにすることによって、その広まった範囲もより明らかとなり、議論は更に明確なものになったのではないだろうか。

第五章における、一九世紀オランダをはじめとするヨーロッパ勢力が影響力を拡大させる際に既存の現地人首長を統治に利用した背景には、二つの状況があると思われる。

一つは、現地社会で既存の秩序が保持された状況にあったということ、もう一つは、その下で現地人首長がヨーロッパ勢力に仲介役として認められなければならなかったということである。このことから、ヨーロッパ勢力が東南アジア地域に拡大していく中で、現地首長の位置づけに変化が生じたことに注目せねばならないだろう。また、これら現地首長がイスラームの宗教活動に熱心だったことは、当時の現地首長の実像を示す非常に興味深い事例である。次章で展開される民族主義運動の展開とも、このことは連関することとなる。なお、この後本章ではマラッカ海峡をはじめとする海域世界の事例についても論じているが、その議論が非常に簡略だったのは残念である。この海峡世界が、本書の主要な議論の舞台であるスマトラ島やジャワ島と密接に関係していることや、前章でマレー世界の展開を論じていることを考慮すれば、もっと詳しい議論が必要だったのではないだろうか。

第六章で中心に述べられていることは、現地首長や「外来東洋人」および欧亚混血者から、官僚養成学校出身者やオランダ人の下での職務経験を持つ者への、仲介役の大きな変化と、その変化に対する新旧双方の仲介者の対応であるといえる。特に、この変化を経た後に民族主義運動が展開するなか、現地首長やインドネシア人官吏が、自らの役割を拡大ないし再構築するためにオランダに提供する情報

の操作を行ったことは、筆者の主張するように、彼らが単なる植民地政庁の命令伝達者ではなかったことを示す事例である。このことは、同時期の反植民地運動に関する研究に、新たな光を投げかけるものであろう。またこの事例は、独立後のインドネシアにもあてはまるものであり、近現代史において非常に重要視すべき事柄であると考えられる。

三・二 本書全般に関する評論——東南アジア地域における仲介者の「連続性」と「変化」——

本書の各章で述べられた、一五世紀以降の仲介者の展開については、次のようにまとめることができよう。即ち、一五—一六世紀における交易の発展や、一九世紀以降ヨーロッパ勢力が東南アジア地域で影響力を拡大するなかで、媒介役の構成は拡大し大きく変化する。しかし、当該時期を通じて、彼らが必要とされる状況は存在し続けた。この仲介者の存在に関する連続性に注目すると、当該時代のみにとどまらない議論が展開できるだろう。

その場合、まず一五世紀以前の時代との連続性を考えなければならぬ。第一—二章で述べられているような、港市における外来宗教・文化の採用や中華秩序の重要視、超自然的力を持つ支配者イメージといった、港市支配者が仲介者たる役割を示す事柄は、一五世紀以前にも見られるものであったからである。一つの例として、七世紀後半より中継港としてマラッカ海峡地域に影響を及ぼしていたシュ

リーヴィジャヤ⁽³⁾をとりあげてみたい。このシュリーヴィジャヤは、唐僧義浄の記録に代表される漢籍資料では、唐に朝貢を行い、大乘仏教が盛んであったと記録される。しかしながら一方で、この国の都があったとされる南スマトラのパレンバン周辺から発見された碑文の殆どは、内容において大乘仏教には全く言及せず、逆に呪術的信仰の要素を強調する。そしてこれらの碑文の中には、シュリーヴィジャヤの支配者が超自然的力を持つことを窺わせる内容を含むものもある。上記の史料状況から、シュリーヴィジャヤでは、一方で外来者を引きつけるために大乘仏教、他方で地域内住民を引きつけるために呪術的信仰と、二つの宗教を、いわば使い分けていたと考えられている「深見一九九四」。本書第一章で述べられているように、一五世紀以前の内陸後背地住民は、自給的生産活動の合間に採集した産物を搬出して交易活動に参加しており、彼らはまだ一五世紀以降ほどには港市の商業活動に組み込まれていなかった。このことから、一五世紀以前の港市―内陸後背地の交流は、それ以降と比較するとそれほど活発でなかったと考えられる。そのため、一五世紀以前では、一五世紀以降に比べて内陸民の価値観と港市社会や外来者の価値観との間には大きな開きがあったといえよう。これらを考慮すれば、上記の状況にあった両者を媒介した一五世紀以前における港市支配

者の役割の重要性は、それ以降と比較しても決して低くなかったといえる。そして、このような一五世紀以前に港市支配者によって構築された原理は、一五世紀以降にも影響力を持っていた。本書第四章で述べられる『ムラユ王統記』で、ムラカ王家がシュリーヴィジャヤの後継者であると主張して海上民と構築したケースは、その一つであるといえよう。これらの事例から考えると、一五世紀以前の港市支配者も、広域世界と地域世界とを媒介する役割を持っていたと考えるのが妥当であろう。そして、上記のような港市支配者などを仲介者たらしめる要素も、一五世紀以前から存在していたものが、交易の拡大する一五世紀以降に入ってから本書で述べられているようなものに変化し、より詳しい意味付けがなされたと考えたほうが適当なのではないだろうか。

一方で、媒介者は、当該時代以降も存在し続けているといえる。その一例として、独立後のインドネシアの事例が挙げられる。二〇世紀前半の日本統治時代、オランダ植民地時代の制度が崩壊する中で、現地首長やインドネシア人官僚ら有力者層は、一旦排除された。しかしインドネシア人独立後、特に一九五〇年代以降、彼らは地方を中心に、インドネシア国民党やゴルカルといった政党を通じた活動に関与し、子弟を官僚養成学校に入れることによって、イン

ドネシア政府と関係を持つに至った[Anderson 1990]。ここで重要なのは、このような動きが活発に起こったのが地方だったということである。このことは、独立後インドネシア政府が各地方まで一元的に支配を及ぼすことができなかった状況下において、現地の有力者が、政府と関係を持つことで、いわば中央と地方とを仲介する役割を担おうとしたと考えられよう。そして、その関わり方については、政党活動などによるといった変化が見られる。時代状況の変化に応じて、現地社会と中央政界との媒介役が、再び台頭したのである。

四 終わりに

以上のように、東南アジアの古代から現代までのそれぞれの時代において、「内」と「外」とを分けたり統合したりする仲介者は、地域世界と広域世界との関係を考察する上で、きわめて重要な役割を担っていた。

ここで扱われたテーマは、本書が中心的に展開しているスマトラ島やジャワ島だけでなく、海域世界や大陸部にも当てはまるものであろう。その意味では、本書が提起した問題の意義はきわめて大きい。本書の問題提起をもとに、各時代および各地域で仲介者の存在を考慮した研究が行われることが期待される。

注

- (1) イスラーム同盟は、後に運動が展開する中で、「非原住民」を同盟員から排除する決議がなされアラブ人有力者が幹部になれないとされるなど、次第に現地人の団体へと変容する。
- (2) 東インド党は、結成翌年にオランダにより解散させられるが、運動を支えた欧亜混血者を吸収するため一九一四年に東インド社会民主主義協会が成立し、一九二〇年の東インド共產主義同盟への改称を経て、一九二四年にインドネシア共産党となった。
- (3) 男性にとつて性的対象である女性のみが住むとされた「女人が島」は、「不気味さ」を含まない内容で語られた場合には、逆に彼らの興味をひく対象となり得たのではないか。
- (4) このほかに、本文中でマレー商業文化という単語が現れるが、この単語についてもその定義やマレー文化との相違点などの説明は見られない。確かに、筆者が本章注三で述べているように、マレー文化がマレー人とともに固定的に定義しにくいという面があるのは事実である。しかし、時代的な変遷を含め最低限の定義は明らかにしておく必要はあったらう。
- (5) 本文でも述べられているように、シュリーヴィジャヤは、『ムラユ王統記』でムラカ王家がその後継者と見做す港市国家である。しかしながら、その存在した時期については、特に後代について明確ではなく、近年では一〇世紀以降中国資料に現れる三仏斎をシュリーヴィジャヤとは見做さず「深見一九八七」、九世紀までをその存在した時期とする説が有力である。なお、ここでは中国資料に室利仏逝国として現れ、比較的刻文資料も多い七世紀後半の状況から論じることにする。

(6) この中国への朝貢については、四―五世紀に最盛期を迎えた扶南をはじめ、シュリーヴィジャヤを含めた多くの国が朝貢を行っている。この背景には、当時の各港市が中国を主要な貿易相手と認識し、自らが中国と関係を持っていることを示すことで地域内支配を有利に進めようとした事情があったと考えられる。

(7) 前出のシュリーヴィジャヤにおける宗教的状况は、このことを最もよく表した事例であるといえよう。七世紀後半にシュリーヴィジャヤを訪れた中国唐の僧侶義浄は、この地の大乘仏教をインドのものと同く同じであると記録している。この記述から、当時シュリーヴィジャヤの大乗仏教は、外来者用で土着化していないいわば「借り着」であり、地域内支配では従来の呪術的信仰が用いられたとされている。このことは、外来者と地域住民が宗教面で全く異なった状況にあったことを示す事例であり、シュリーヴィジャヤの支配者が、この両者を仲介することの重要性は非常に高かったと考えることができる。

参考文献

池端雪浦(編)

一九九八 『東南アジア史Ⅱ 島嶼部』山川出版社。

鈴木恒之

一九九八 「東南アジアの港市国家」岩波講座世界歴史

第一三巻 東アジア・東南アジア伝統社会の形成』岩波書店 一九三―二二四。

深見純生

一九八七

「三仏斉の再検討―マラッカ海峡古代史研究の視座転換」『東南アジア研究』二五―二〇五―三二。

深見純生

一九九四

「シュリーヴィジャヤ帝国」池端雪浦(編)『変わる東南アジア史像』山川出版社 四七―六九。

Anderson, B. R. O'G.

1990

Language and Power: Exploring Political Cultures in Indonesia. Ithaca and London: Cornell University Press.

Hall, K. R.

1985

Maritime Trade and State Development in Early Southeast Asia. Honolulu: University of Hawaii Press.

Kathirithamby-Wells, J. / Villiers, J. (eds.),

1990

The Southeast Asian Port and Polity: Rise and Demise. Singapore: Singapore University Press.

Reid, A.

1988, 1993

Southeast Asia in the age of commerce 1450-1680. 2 vols. New Haven and London: Yale University Press.